〔第十章〕

一　パリサイ人とサドカイ人と來りてイエスを試みんとて、天よりの徴を示さん事を請ふ。答へて

二　言ひ給ふ「夕には汝ら『空赤き故に、晴なり』と言ひ、

三　また朝には『空紅くして曇る故に、今日は風雨なり』と言ふ。汝ら空の氣色を見分くることを知りて、時の徴を見分くる事能はぬか。

四　邪曲にして不義なる代は徴を求む。然どヨナの徴の外に徴は與へられじ」と斯て彼らを離れて去り給ふ。

五　弟子たち彼方の岸に到りしに、パンを携へ

六　ふることを忘れたり。イエス彼らに言ひ給ふ「愼みてパリサイ人とサドカイ人とのパンだねに心せよ」と語り合ふ。

七　弟子たち互に、我らはパンを携へざりしと語り合ふ。

八　イエス知りて言ひ給ふ「あゝ信仰うすき者よ、何ぞパン無きことを語り合ふか。

九　未だ知らぬか、五つのパンを五千人に分ちて、そのあまりを幾筐ひろひ、また七つのパンを四千人に分ちて、その餘を幾籠ひろひしかを覺えぬか。

十　我が言ひしはパンの事にあらぬを何ぞ知らぬか」と。

十一　ここにパリサイ人とサドカイ人とのパンだねに

十二 ねを慎め』 爰に弟子たちイエスの慎めと言ひ給ひしは、パンのたねにはあらで、パリサイ人とサドカイ人との教なる事を悟れり。

十三 イエス、ピリポ・カイザリヤの地方に到り、弟子たちに問ひて言ひ給ふ『人々は人の子を誰と言ふか』

十四 彼ら言ふ『或人はバプテスマのヨハネ、或人はエリヤ、或人はエレミヤまた預言者の一人』

十五 彼らに言ひ給ふ『なんぢらは我を誰と言ふか』

十六 シモン・ペテロ答へて言ふ『なんぢはキリスト、活ける神の子なり』

十七 イエス答へて言ひ給ふ『バルヨナ・シモン、汝は幸なり、汝に此を示したるは血肉にあらず、天に在す我が父なればなり。

十八 我は汝に告ぐ、汝はペテロなり。われ此の磐の上に我が教会を建てん、黄泉の門は之に勝たざるべし。

十九 われ天國の鍵を汝に與へん、凡そ汝が地にて禁ずる事は、天にても禁ぜられ、凡そ汝が地にて許す事は、天にても許されん』

二十 已がキリストなる事を誰にも告ぐなと弟子たちを戒め給へり。

二十一 此の時よりイエス・キリスト、弟子たちに、

※或は「縛ぶる所は天にても縛じ、地にて許す所は天にても許されん」と訳す。廿三節のペテロと同義なり。

のエルサレムに往きて、長老・祭司長・學者らより、
多くの苦難を受け、かつ殺され、三日目に甦るべ
き事を示し始め給ふ。ペテロ、イエスを傍に引
き戒め出でて言ふ『主よ、然かあらざれ、此の事な
んぢに起らざるべし』イエス振返りてペテロ
に言ひ給ふ『サタナよ、我が後に退け。汝は我を躓
かする者なり。汝は神の事を思はず、反って人の
事を思ふ』爰にイエス弟子たちに言ひ給ふ『人
もし我に後ひ来らんと思はば、己をすて、己が十
字架を負ひて、我に従へ。己が生命を救はんと

聖書改譯原稿用紙

思ふ者は、これを失ひ、我が為に、己が生命を失ふ
者は、之を得べし。人、全世界を得とも、己が生命
を失はば、何の益あらん。また人、何をもて己が
生命にかへん。人の子は父の榮光をもて、御使
たちと共に来らん。其の時おのおのの行に従ひ
て報ゆべし。まこと誠に世の中に告ぐ。此に立つ
者のうちに、人の子の其の國をもて来るを見る
までは、死を味はぬ者どもあり』

第七章

一 六日の後、イエス、ペテロ、ヤコブ、及びヤコブ
の兄弟ヨハネを引きつれ、人を避けて高き山に
二 登り給ふ。 斯て彼らの前にて其の狀かはり、其
の顏は日の如く輝き、其の衣は光の如く白くな
三 りぬ。 視よ、モーセとエリヤとイエスに語りつ
四 つ、彼らに現はれたり。 ペテロさし出でイエ
スに言ふ『主よ、我らの此処に居るは善し。御心な
らば、みゝ此処に三つの廬を造り、一つを汝のた
め、一つをモーセのため、一つをエリヤのために
作らん。』

聖書改譯原稿用紙

五 世此 彼なほ語りをる時、視よ、光れる雲、彼らを
覆ふ。 また視よ、雲より声ありて言ふ『これは我が
六 愛しむ子、我が喜ぶ者なり汝ら之に聽け。』 弟子
七 たち之を聞きて倒れ伏し、懼るゝ事甚だし。 イ
エスその許に来り之に觸りて『起きよ、懼るなと
八 言ひ給へば、彼ら目を擧げしに、イエス一人の
他には誰も見えざりき。 別行 山を下る時、イエス彼
九 らに命じて言ひ給ふ『人の子の、死人の中より甦
るまでは、見たる事を誰にも語る莫れ。』 弟子たち
十 問ひて言ふ『さらば、エリヤ先きたるべしと学者

雲のごとく 白く光り

十一 らつ言へる何ぞ『也』答へて言ひ給ふ『賢』にエリ
十二 ヤ来りて萬の事をあらためず。われ汝らに告
ぐ。エリヤは既に来れり。然ど人々これを知らず。
友つて心のまゝに待へう。斯の如く人の子も亦
十三 人々より苦めらるべし』爰に弟子たちバプテ
スマのヨハネを指して言ひ給ひしなるを悟れ
り。
十四 彼ら群衆の許に到りし時、或人、御許に来り
十五 跪きて言ふ、『主よ、我が子を憫み給へ。癲癇にて
痛く苦み、屢火の中に屢水の中に倒るゝなり。

十六 これを御弟子たちに連れ来りしに、彼ら医すこ
十七 と能はざりき』イエス答へて言ひ給ふ『あゝ信
なき曲れる代なるかな、我いつまで汝らと偕に
をらん。何時まで汝らを忍ばん。其の子を我に連
十八 れ来れ』遂にイエス之を禁め給へば悪鬼いで
其の子此の時より癒えたり。
十九 爰に弟子たち窃にイエスに来りて言ふ『われらは何故に逐ひ
出し得ざりしか』彼らに言ひ給ふ『汝ら信仰
二十 すき故なり。われ誠に汝らに告ぐ。もし芥種ほど
の信仰あらば、此の山に『此処』虎より彼虎に移れと

言はん。さらば移らん、斯て汝ら能はぬこと無
べし。
四四 彼らがリラヤに集ひまる時、イエス言ひ給
四三 ふ『人の子は人々の手にわたされ、
殺さん、斯て三日目に甦るべし』弟子たち痛く悲
四二 めり。
四一 彼らカペナウムに到りし時、税金を集むる
者どもペテロに来りて言ふ『汝らの師は税金を
四〇 納めぬか』ペテロ『納む』と言ひ、家に入りしに、
三九 逸速くイエス言ひ給ふ『シモン如何に思ふか、

三八 世の王たちは税または貢を誰より取るか、己が
子よりか他の者よりか』ペテロ言ふ『他の者よ
三七 り』イエス言ひ給ふ『されば子は自由なり。
三六 但彼らを躓かせぬ為に、海に往きて釣を垂れ、初に
上る魚を取れ、其の口をひらかば銀貨一つを得
んそれを取りて我と汝との為に納めよ』

※異本の類本加
断食と祈らざれ
ばと出でざるな
よし

※希臘「スタテール」

第十八章

一 其の時弟子たち、イエスに來りて言ふ、「しからば誰か天國にて大いなる[偉]イエス幼兒を呼び、彼らの中
二 に立てて、言い給ふ、「われ誠に汝らに告ぐ、若し汝ら
三 飜りて幼兒の如くならずば、天國に入るを得じ。さ
四 れば誰にてもこの幼兒の如く己を卑うする者は、
五 かくの如き一人の幼兒を受くる者は、我を受くるなり。されど我を信ずる此の小さき者の一人を躓かす
六 する者は、寧ろ大なる碾臼を頸に懸けられ、海の深處

聖書改譯原稿用紙

七 に沈められん方益なり。此の世は躓物あるによ
り て禍なるかな。躓物は必ず來らん。されど躓物を
八 來らする人は禍なるかな。若し汝の手、又は足汝を躓
かせば、切りて棄てよ。不具又は跛にて生命に入るは、
両手両足ありて永遠の火に投げ入れらるゝよりも勝る
九 なり。若しなんぢの眼汝を躓かせば抜きて棄てよ。
片眼にて生命に入るは、両眼ありて火すゞへナに投げ
十 入れらるゝよりも勝るなり。汝ら愼みて此の小き者の一人をも侮るな。我汝らに告ぐ、彼らの御使たちは天にありて、天に在す我が父の御顏を常に見

十一 なり。〔十一〕 汝ら如何に思ふか。百匹の羊を有てる
人あらんに、若その一匹迷はば、九十九匹を山に遺し
置き、行きて迷へるものを尋ねぬか。もし之を見出
十三 さば、我誠に汝らに告ぐ、迷はぬ九十九匹に勝りて此
の一匹を喜ばん。斯のごとく此の小き者の一人の
十四 亡ぶるは、天に在す汝らの父の御心にあらず。若
十五 人の兄弟罪を犯さば、往きて ただ彼とのみ、相對し
て諫めよ。もし聽かば其の兄弟を得たるなり。
十六 聽かずば一人二人を伴ひ往け。これ二三の證人の口
に由りて、凡ての事の證めらるん為なり。若
十七 も聽かずば、之を教會に告げよ。若し教會にも聽かず
ば、之を異邦人または取税人のごとき者とすべし。
十八 まことに誠に汝らに告ぐ、すべて汝らが地にて繋ぐ所は
天にても繋ぎ、地にて解く所は天にても解かん。
十九 また誠に汝らに告ぐ、もし汝らの中二人、何にても求む
る事につき地にて心を一にせば、天に在す我が父は
其の為にこれを成し給ふべし。二三人我が名により
二十 て集る処には我も其の中に在るなり。
二一 爰にペテロ御許に來りて言ふ「主よ、我が兄弟我
に對して罪を犯さば、幾度赦すべきか。七たびまでか。

二二 イエス言ひ給ふ「汝我れ七度までとは言はず「七度を
二三 七十倍するまでと言ふなり。此の故に天國は其の
二四 家來どもと計算をなさんとする王の如し。
二五 始めし時一萬タラントの負債ある家來連れ來られ
二六 しに、償ひ方なかりしかば、其の主人此の者と、其の妻
二七 子と其他凡ての所有とを賣りて償ふことを命じたれば、其の家來ひれ伏し、拝して言ふ「覺くしたまへ
二八 さらば悉く償はん。其の家來の主あはれみて之を
解き、其の負債を免したり。然るに其の家來出でて、
すぐに百デナリの負債ある一人の同僚に會ひ、之を

聖書改譯原稿用紙

二九 捕へ喉を締めて言ふ「負債を償へ」其同僚ひれ伏し、
三〇 願ひて「覺くし給へ、さらば償はん」と言へど、肯はず
して往き、其の負債を償ふまで之を獄に入れたり。
三一 同僚どもありし事を見ていたく悲しみ、往きて
し凡ての事を其の主人に告ぐ。
三二 こゝに主人彼を呼び出
て言ふ「惡しき家來よ、なんぢ願ひしによりて、かの
三三 負債を悉く免せり。我が汝を憫みし如く汝も亦同
僚を憫むべきにあらずや」
三四 斯く其の主怒りて負債
を悉く償ふまで彼を獄卒に付せり。
三五 若し汝ら各
心より兄弟を赦さずば、我が天の父も亦なんぢらに

斯(かく)の如(ごと)く為し給(たま)ふべし」